



フロントランナー

Front Runner

この夜、街で初めて見かけた高齢男性はイヤホンで耳を塞いだまま。黙ってそばに居続ける時から伴走支援は始まる＝北九州市小倉北区

NPO法人「抱樸」理事長・牧師 **おくだ 奥田** **ともし 知志さん** (53歳)

困窮者の自立めざし伴走

真夜中、誰もいない百貨店の前。ベンチに座る人影に近づくと、話しかけるなっ！

声を荒らげてうずくまったのは大荷物を抱えた高齢の男性だ。拒まれても、横にしゃがみ込む。5分、10分、20分。長い沈黙を破って名刺を差し出すと、男性が顔を上げた。

「おお、あんたか。昼間にあなたの施設の前を通ったが、入りにくかった。」「そうですか。それは本当に申し訳なかったわー」。笑顔で返す。

30年近く、北九州市中心部で夜の炊き出しと、未明まで続く市内巡回を仲間と共に続ける。冬の3カ月は毎週金曜日、それ以外は月2回。中止したのは台風が直撃した1回だけ。この街をさまよう人なら大抵知っている。

生活困窮者とのわずかな会話で得た情報は、自らが率いるNPO法人のデータベースに登録。以後、複数のスタッフが家族のようにかかわり、更新していく。この継続が就労支援、生活保護申請、アパート入居、金銭管理、療養介護、看取りへとつながっていく。

困窮者への「伴走型支援」だという。路上生活を脱したのは約3千人。自立率9割という驚異的な実績をあげ、全国で「困窮者支援の第一人者」と認められるまでになった。

生まれは大津市。大手企業のサラリーマン家庭に育ち、中学2年でキリスト教の洗礼を受けた。だが関西学院大1年の時に大阪・釜ヶ崎を訪れ、信仰心は揺らぐ。酒と排泄物の臭いに満ちた日雇い労働者の街に、名前も年齢も知れぬ遺体が転がっていた。

神は一体どこにおる！
心でののしりながら、20歳で決意した。「こんな世の中だから、神様おつてもらわんと困る。牧師になって、おじさんたちと一緒に神様を探す」

1990年に北九州の教会から呼ばれ、百万人都市でホームレス支援を本格化。最初の10年、路上死が出るたびに怒り狂った。「殺人行政」と書いたプラカードを掲げ、役所に押しかけた。次の10年は市と協働するようになったが、ホームレス問題にのめり込む牧師のあり方を巡って教会は分裂。地元中学で不登校になった長男の愛基さん（後に学生団体「SEALDs」創設メンバー）は、単身離島へ。

4年前、高齢化する行き場のない人が住む施設を、自宅を兼ねた教会の真向かいに新築した。全30室が個室で、元受刑者も受け入れる。計画段階で住民の一部が猛反発。当時林立した反対の幟が、今なお本たなびく。

なぜ、そこまでやるのか。そう問うと、鋭い目で聞き返された。「同じ命や。理由がないといかんですかね？」

文・高橋美佐子 写真・金子淳

3面に続く

ご意見・ご感想はbe@asahi.com

フロントランナー

Front Runner

(1面から続く)

奥田 知志さん NPO法人「抱樸」理事長・牧師

北九州市で5月に起きたアパート火災では、6人が死亡。うち1人は、奥田さんのNPO法人が伴走してきた人でした。

元ホームレスで年金暮らしの77歳。彼を含め、身元が判明したのは4人。身よりのない人たちが多く暮らす場所だったんです。全国の超安価な賃貸住居でも同じような状況でしょう。

「そうした人たちに、30年近くかかわった。僕らの「伴走型支援」は、一人ひとりを記憶にとどめていきます。データベースに登録した2千人以上について、スタッフ18人が体調や生活状況を見守り、

情報を蓄積。職探しや家探しなども一緒に試み、看取りまで続けます。住居を得て自立した人でも、死後に家族が迎えに来るのは半数。火災で亡くなった男性も引き取り手がなく、私が葬儀をあげ、教会の納骨堂に安置しました。

悩んで泣いた

「NPO法人はどんな態勢ですか？」

現在スタッフ100人以上を抱え、7割が正規職員。行政からの委託を含む年間事業費は5億円ですが、伴走型支援にかかる2千万円以上は寄付金頼み

で、決算は赤字です。市内の路上死はここ数年はゼロ。でもかつては最多で年に十数人も。僕らが弁当を持って訪ねるおじさんたちは当時、生活保護や医療を受けるには入院しなくて、それも瀕死になるまで放置された。亡くなるたびに悔しくて「お前らが殺した！」と役人に罵声を浴びせました。

「行政と対立した？」

2000年夏、僕らの炊き出しが排除されかけたんです。その際、アパートに暮らす元ホームレスが前に進み出て、僕らを指さすと「この人たちが全部やってくれた」と言った。いや実

は、全部なんてやっていなかった。それで行政との交渉をやめて01年、なけなしの金でアパート5室を借り、九州初の「自立支援住宅」をつくりました。

「困窮者が自立に向けて半年間を過ごす施設です。70人も応募したとか。65人を落とさなければならなくなった。入れない人ももし翌日亡くなったら？」

よいことをしている興奮は冷め、選考会議は日付が変わっても結論を出せず、僕は「罪人の運動」とホワイボードに書き殴った。

「2000年夏、僕らの炊き出しが排除されかけたんです。その際、アパートに暮らす元ホームレスが前に進み出て、僕らを指さすと「この人たちが全部やってくれた」と言った。いや実

孤立させない

「02年、通称「ホームレス自立支援法」が成立した。北九州市が翌03年、「巡回相談や自立支援センターの運営を任せたい」と言ってきた。僕はその秋から、キリスト教を勉強しにドイツ留学を決めていたので、悩みに悩んで居残りを決めました。

すると、もともと留学に反対だった教会のメンバーが「ホームレスの言うことなら聞くのか」と怒る。礼拝に来る2割が去り、献金も激減しました。だから僕1人が引張ってきた教会の運営を、信徒全員で担う方式に変えたのです。

「同じころ、長男の愛基さんが不登校に。野宿状態の人には「人間生きてりゃいい」と言いながら、自分の子には「将来どうすんだ！」と心の中で

責めてしまう。息子がたった1人で離島へ渡った時、僕は親の責任を放棄していいのではないかと苦しみました。でも島の里親さんに「助けてください」と泣いて頭を下げて、気がつきました。僕を含む大人が助けを求められない状況が、子どもを追い詰めるんだと。あの時、息子を連れ戻していたら、死なせてしまったかもしれない。

「14年、法人名を「北九州ホームレス支援機構」から「抱樸」にしたのは？

抱樸は老子の言葉。僕は「ささくれたった原木を抱けば自ら傷つく」との意味を込めています。僕らも傷を負いながら、汗と涙で困窮者に伴走します。実際、大変な人もいっぱいいて、しんどい。悩み抜く。でも、その「原木」との出会いの中で、自身が救われることもある。

「人と地域とのかかわりをつくることに力を入れています。」

ホームレスは不幸、役に立たない、危険というイメージが根強い。でも、極限状況に身を置いた本人だからこそ語れる言葉を持っている。僕らは、ホームレス経験者でつくる「生笑一席」を抱えています。

「何ですか？」

劇団のようなもので、誰からも心配されず、ひそかに自ら命を絶とうとした過去を、小中学校などで語ります。いじめや不登校がなくならない中、「つらい時は『助けて』と言っている」というメッセージをしっかりと伝えながら、年20回ほど全国を回っています。



「軒の教会」とも呼ばれる東八幡キリスト教会の日曜礼拝。聖書の教えを説く語り口は時に落語を思わせ、信徒約80人の笑いを誘う＝北九州市八幡東区

「困窮経験者もやがて支援する側に回れる」

プロフィール

★1963年、大津市生まれ。祖父は神主だった。幼いころの夢は落語家。友人に誘われてキリスト教会に通い始めた。

★82年、関西学院大神学部で学びながら、大阪・釜ヶ崎でのボランティア活動を開始。

★88年、バプテスト派について学ぶため、福岡市の西南学院大へ。妻の伴子さん＝写真下＝と結婚。北九州市



のホームレスに、おにぎりを配り始める。

★90年、日本バプテスト連盟の牧師として、北九州市の東八幡キリスト教会に赴任した。

★2000年、NPO法人「北九州ホームレス支援機構」を設立。翌年、九州初の支援施設を開く。

★14年、NPO法人の名称を「抱樸」に変更。「生活困窮者自立支援全国ネットワーク」を組織し、共同代表に就任。

★愛読書は聖書。年間50回以上の講演を受け、全国を飛び回る。

◆次回は、カンヌ国際映画祭などの国際舞台でオリジナル作品が高く評価され、いまは後進の育成にも心血を注ぐ映画監督、河瀬直美さんの予定です。